

千代紙の春

小川未明

青空文庫

町まちはずれの、ある橋はしのそばで、一人ひとりのおじいさんが、こいを売うつていました。おじいさんは、今朝けさそのこいを問屋とんやから請うけてきたのでした。そして、長い間ながあいだ、ここに店みせを出だして、通とおる人々ひとびとに向むかって、

「さあ、こいを買かってください。まけておきますから。」と、人ひとの顔かおを見みながらいっていました。

ひとひと人々なかの中なかでは、立ち止たどまって見みてゆくものもあれば、知らぬ顔かおをして、さつさといつてしまうものもありました。しかし、おじいさんは、根気こんきよく同じおなことをいっていました。

そうするうちに、「これは珍めづらしいこいだ。」といつて、買かって

ゆくものもありました。そして、暮れ方までには、小さなこいは、たいてい売りつくしてしまいました。けれど、いちばん大きなこいは売れずに、盤台ばんだいの中なかに残のこっていました。

おじいさんは、大きなのが売れないので、気が気でありませんでした。どうかして、それをはやく、あたりが暗くらくならないうちに売うつてしまいたいと、焦あせっていました。

「さあ、大きなこいをまけておきますから、買かつてください。」と、しきりにおじいさんはわめいていました。

みんな通とおる人ひとは、そのこいに目めをつけてゆきました。

「大きなこいだな。」といつてゆくものもありました。

そのはずであります。こいは、幾いくねん年ねんか大おおきな池いけに、またある

ときは河かわの中なかにすんでいたのです。こいは、河かわの水みず音おとを聞きくに
つけて、あの早瀬はやせの淵ふちをなつかしく思おもいました。また、木き々ぎの影かげ
に映うつる、鏡かがみのような青あお々あおとした、池いけの故郷こきようを恋こいしく思おもいまし
た。しかし、盤ばん台だいの中なかに捕とらえられては、もはや、どうす
ることもできなかつたのです。そのうえに、もう捕とらえられてか
ら幾いく日にちもたつて、あちらこちらと持もち運はこばれています間あいだに、す
っかり体からだが弱よわつてしまつて、まったく、昔むかしのような元氣げんきがなかつ
たのであります。

おお 大きなこいは、自分じぶんの子供こどものことを思おもいました。また友ともだちの
ことを思おもいました。そして、どうかして、もう一度自分どじぶんの子供こどもや、
友ともだちにめぐりあいたいと思おもいました。

「さあ、こいを買かつて行ってください。もう大きいのが一ぴきになりました。うんとまけておきますから、買かつて行ってください。」

おじいさんは、その前まえを通とおる人ひとたちに向むかって、声こえをからして
いっていました。晩ばん方がたの道みちを急いそぐ人ひとたちは、ちよつと見みたばかりで、

「このこいは値ねもいいにちがいない。」と、心こころの中うちで思おもつて、さつさと行ってしまふものばかりでした。

おお 大きなこいは、白しろい腹はらを出だして、盤ばん台だいの中なかで横よこになつていました。こいは、よく肥こえていました。けれど、もはや水みずすら十分ぶんに飲のむこともできなかつたので、この後のち、そんな長ながいこと命いのちが

保たれようとは考えられませんでした。

春先であつたから、河水は、なみなみとして流れていました。その水は、山から流れてくるのでした。山には、雪が解けて、谷という谷からは、水があふれ出て、みんな河の中に注いだのです。こんなときには、池にも水がいつぱいになります。そして、天気の良い暖かな日には、町から、村から、人々が釣りをしに池や河へ出かけるのも、もう間近なころでありました。

あわれなこいは、そんなことを空想していました。

このとき、一人のおばあさんがありました。つえをついて、この橋の上にきかかりました。おばあさんには、心配がありません。だから、とぼとぼと下を向いて歩いて、元気がなかつたのです。

それは、かわいい孫まごの美代子みよこさんが、体からだが悪わるくて、家うちにねていたからです。

「どうかして、早くはや、美代みよの病びょう氣きをなおしたいものだ。」と、おばあさんは、このときも思おもっていました。

美代子みよこさんは、ちようど十二でした。このごろは、体からだが悪わるいのがっこうで学が校こうを休やすんで、医い者しゃにかかっています。けれどなかなか昔もとのように元げん氣きよく、快よくなおりませんでした。そして、美代子みよこさんは、毎まい日にち、ねたり起おきたりしていました。起おきているときは、お人にんぎ形ようの着き物ものを縫ぬったり、また、雑ざつ誌しを讀よんだり、絵え本ほんを見みたりしていましたけれど、もとのように、お友ともだちと活かつ弁ぱんに、外そとへ出でて駆かけたりして遊あそぶようなことはなかつたのです。

美代子みよこさんのお母さんかあや、お父さんとうばかりではありませんでした。心配しんぱいをしたのは、家うちじゆうのものでありませんでした。

「ほんとうに、あの子この病びょう気きは、なぜなおらないのだろうか？」と、おばあさんは、いつもそのことを思おもいながら、つえについて歩あるいて、橋はしのたもとにきかかったのです。

「さあ、こいをまけておきますから、買かって行ってください。」と、おじいさんはいっていました。

おじいさんは、早はやくこいを売うって家うちへ帰かえりたいと思おもいました。家うちには、二人ふたりの孫まごが、おじいさんの帰かえるのを待まっていたからです。おじいさんの家うちは貧びん乏ぼうでした。そして、おじいさんが、こうしてこいを売うって金かねにして帰かえらなければ、みんなは楽たのしく、夕飯ゆうはん

を食^たべることもできなかつたのであります。

「さあ、まけておきますから、こいを買^かつていってください。」
と、おじいさんは、熱^{ねっしん}心^{しん}にいいました。

おばあさんは、それを聞^きくと、つえをつきながら、立^たち止^どまりました。そして、橋^{はし}のそばに、店^{みせ}を開^{ひら}いている、盤^{ばん}台^{だい}の中^{なか}の大^{おお}きなこいに目^めを止^とめたのであります。

おばあさんは、こいを病^{びょう}人^{にん}に食^たべさせるとたいそう力^{ちから}がつかうという話^{はなし}を思^{おも}い出^だしました。

「ほんとうに、いい大^{おお}きなこいだな。」と、おばあさんはたまげたようにいいました。

「まけておきます。どうぞ買^かつていってください。」と、おじい

さんは声をかけました。

「うちの小さな娘が病気だから、それに買っ^かて買ってやろうと思^{おも}つてな。」と、おばあさんはいいました。

「このこいをおあがりなされば、すぐに病気^{びようき}がなおります。」と、おじいさんは答^{こた}えました。

おばあさんは、じつと大きなこいが、肥^こえた白^{しろ}い腹^{はら}を出^だしているのをながめていましたが、

「なんだか、このこいは、元^{げんき}気がないな。じつとしている。」と、おばあさんは、こごんでいいました。

「どういたしまして、これが弱^{よわ}っているなどといったら、元^{げんき}気のいいのではありません。」と、おじいさんはいいました。

おばあさんは、それでもくびを傾けていました。

「死んでいるのではないかい。」と、おばあさんはたずねました。

「あんなに、口をぱくぱくやっているではありませんか。」と、おじいさんはいいました。

「いくらだい？」

「大まけにまけて一両よりしかたがありません。」と、おじいさ

んは答えました。

「どれ、ちよつと尾を持って、跳ねるか見せておくれ。」と、おばあさんは、註文をしました。

このとき、ほんとうにこいは、死んでいるようにじつとしていました。おじいさんは、おばあさんがそういうので、大きなこ

いの尾おを握にぎつて高たかくさしあげました。

こいは、このときだと思おもつたのです。いま自分じぶんが逃にげなければ数すう分ぶん間のうちうちに殺ころされてしまおもうと思おもいましたから、力ちからまかせに、おじいさんの腕うでを尾おでたたきつけて、おじいさんがびっくりして、手てを放はなしたすなきに河かわの中なかへ一ひと飛とびに、飛とび込こんでしまおもつたのです。

「あ、こいが逃にげた！」

と、通とおりすがりの人ひと々びとは叫さけんで、黒くろくその前まえに集あつまりました。おじいさんも、おばあさんも、びっくりしましたが、中なかにもおじいさんは、この大おおきなここいを逃にがしてしまおもつたので大おお損そんをしなければなりません。孫まごたちに夕ゆう飯はんのおかずをか買ってゆゆくどころでありませんでした。

「尾おをつかんで、上げてみせろなどといわなけりや、こいが逃にげてしまうことはなかつたのです。どうか、このこいのお金かねをください。」と、おじいさんは、おばあさんにいいました。

おばあさんは、甲かんだか高ちようしな調子なつてになつて、

「なんで、受うけ取とりもしないのに、代だい金きんを払はらうわけがあるかい。かわいい孫まごの口くちに入はいらないものを、私わたしは、お金かねなんか払はらわないよ。」と、争あらそっていました。

このとき、集あつまつた人々ひとびとの中から、頭かみ髪ながを長ながくした易えき者しやのようおとこな男まえが前でに出てきました。

「おばあさん、こんなめでたいことはありません。死しんだと思おもつたこいが跳はねて河かわの中なかへ躍おどり込こむなんて、ほんとうにめでたいこ

とです。きっとお孫まごさんのご病びょう気きは、明日あすからなおりますよ。孫まごのかわいいのは、だれも同じおなことです。このおじいさんにもかわいい孫まごが家うちに待まっているのだから、おばあさん、こいの代だい金きんをはらっておやりなさい。」と、その髪かみの長ながい男おとこはいいました。おばあさんは、こいの代だい金きんなんど払はらうものかと思おもっていました。が、いまこの男おとこのいうことを聞きくと、なるほど、もつともだと思おもいました。そこで、おばあさんは、しなびた手てで財布さいふの中なかから銭ぜにをとり出だして、おじいさんに払はらってやりました。

おじいさんは、おばあさんが、こいの代だい金きんを払はらってくれらるとにこにこしました。そして、ふところから美うつくしい千代紙ちよがみを出だしました。

「おばあさん、この千代紙は、私が孫に土産に持って行ってやろうと思いましたが、なにも今日に限ったことでない。どうか、ご病氣のお孫さんに持つて行ってあげてくださいまし。」といつて、渡そうとしました。

おばあさんは目を丸くして、

「千代紙なら、うちの子はたくさんもっていますよ。そんなものはいりません。」といつて断りました。けれどおじいさんは、無理に千代紙をおばあさんに手渡しました。

「そういうものでありません。またちがった色の千代紙をもらうと、子供というものは、喜ぶものですよ。」と、おじいさんはいきました。

おばあさんは、千代紙ちよがみをもらつて、ふたたび、とぼとぼとつえをついて歩いてある帰りましたかえ。空には、いい月つきが出ていきましたで。おばあさんは、家うちに帰つてかえ、こいが跳ねて河かわの中なかに飛び込とんで、そのお金かねを払はらつたといふことを話はなしますと、美代子みよこさんのお母かあさんは、

「おばあさんが、こいを受け取りうともなさらないのに、逃にげたこいのお金かねを払はらうのは、ほんとうにばかばかしいことですね。」といわれました。けれど、美代子みよこのお父とうさんは、
 「それはめでたいこつた。きつと美代子みよこの病びよう気きはなおつてしま
 うだろう。」と、ちようどあの髪かみの長ながい、易えき者しゃがいつたような
 ことをいわれました。

そして、おばあさんが、こいが逃げたときのことをくわしく、みんなに話しますと、うちじゆうのものは、そのときの有り様がどんなにおかしかったろうと行って、声をたてて笑いまして。美代子さんは、明るい燈火の下でこの話を聞いていましたが、やはりおかしくてたまりませんでした。そして逃げていったこいは、いまごろどうしたろう。河をのぼって、自分の故郷へ帰ったろうか。そうであつたら、こいの子供や、お友だちは、どんなに喜んで迎えたろうと考えました。

おばあさんは、たもとの中から、美しい千代紙を出して美代子さんに与えました。

「この千代紙は、こい売りのおじいさんが、孫に買って行ってや

ろうと思つたのを、おまえが病氣だといふのでくれたのだよ。」と、おばあさんはいわれました。

「しんせつなおじいさんですね。」と、美代子さんのお母さんは、いわれました。

「こいのかわりに、千代紙をもらったのさ。」と、お父さんは笑われました。美代子さんは、そのこい売りのおじいさんにも、また自分のような年ごろの孫があるのだと知りました。そして、その子は、どんなような顔つきであろう？ なんとなくあつてみたような、またお友だちになりたいような、なんとなくつかしい気持ちがありましたのであります。

「先生が、今日おいでになって、美代子は、お腹に虫がわいた

のではないか？ そのお薬くすりをあげてみようとおっしゃいました。

きつとそうかもしれませんよ、あんまりいろいろなものを食たべますからね。」と、お母かあさんは、お父とうさんにいわれました。

「おばあさん、こいは食たべないほうがよかつたかもしれません。」と、お父とうさんはいわれました。

「早はやくなおつて、学がっこう校へゆくようにならなければいけません。

もうじきに花はなが咲さくのですもの。」と、お母かあさんは、だれにいうとなく話はなされました。

美代子みよこさんは燈火あかりの下したで、千代紙ちよがみをはさみで細こまかに切きつて、いろいろな花はなの形かたちを造つくっていました。そして、病びょうき気がなおつたら、お友ともだちと野原のほらや、公こう園えんへ遊あそびにゆこうと考えていました。窓まど

を開けると、いい月夜でした。美代子さんは、自分の造った千代紙の花をすっかり、窓の外に投げ散らしました。

二、三日すると、庭には、いろいろな花が、一時につぼみを破りました。千代紙の花が、みんな木の枝について、ほんとうの花になったのです。そして、美代子さんの病気はすっかりなおりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

初出：「少女倶楽部」

1923（大正12）年9月

※表題は底本では、「千代紙《ちよがみ》の春《はる》」となっています。

※初出時の表題は「千代紙」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年12月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

千代紙の春

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>